

下人の初見参

——説経節の中の下人——

安 野 眞 幸

はしがき

石井進氏は「主従の関係」⁽¹⁾において、戦後における主従制を巡る研究史の整理を行い、その中で特に「名簿捧呈」や「見参」の儀式・儀礼の研究の重要性を指摘しておられる。氏の「身曳きとへいましめ」⁽²⁾も、「身曳き」を西欧におけるオマージュに対応するものとして取り上げたものとする⁽³⁾ことができよう。また石井氏のこの提言を受けたものに藤原良章「鎌倉幕府の庭中」、保立道久「中世前期の漁業と庄園制」⁽⁴⁾等がある。網野善彦氏もまた「自由と隷属」⁽⁵⁾に關して根本的な見直しの作業を進めておられる。

本稿は石井氏の先の論考・提言に多くを負うものである。石井氏はここで武士の主従関係を譜代相伝・直参と外様・懸参の二類型に纏めておられるが、本稿は石井氏のこの見

解に導かれつつ、説経節の中の下人を分析したものである。考察の結果、第四章・第五章で述べる通り、下人と主人と的主従関係にも武士の主従関係とほぼ同様な儀式や類型が存在することを確認することができたと思う。

本稿で明らかにしたことは、主人の下人支配が、初見参の際の「互酬」を内容とする主人のコトアゲによつていたということである。この他、第一章では海民が「人商人」と関係が深いこと。第二章では山民・狩人の世界には古くから「犯罪奴隷制」があること。第四章では弟子入りの儀式と従者化の儀式との同一性から、職人の世界が下人制度と深く係わっていること等である。以上本稿で明らかにしたことを更に一般化して述べると、これまで下人に対する研究は、専らマルクス主義の枠内で行われていた関係上、農業世界での下人の在り方にのみ関心が集まり、下人は

「奴隸」か「農奴」か、が問われてきたが、虚心に眺める限り、下人は非農業世界においてこそ問題であるということとなろう。

第一章 説経節の中の「太夫」とは何か

説経節「山椒太夫」の物語りにおいて、丹後の国・由良の湊の「山椒太夫」が、製塩業を営み、海と関係の深い人であったことはいままでもない。更にこの物語りでは「山椒太夫」と並んで「人を売つての名人」といわれた「山岡太夫」が登場するが、この「太夫」もまた「七つの時よりも、人買ひ船の相櫓を押し、人売りの名人なり」とあり、海を舞台に生活していた人であることは明らかである。彼は「鹿杖」で「逢岐の橋」を「どうどうと突き鳴らし」て旅の一家を驚かし、舌先三寸で旅の一家をわなにつけ、自分の女房さえも「ことしは親の十三年に当つて、慈悲のお宿を」とだまして岩城一族を自分の家に連れ込み、人買いに売り払う。一方同じ説経節『をぐり』では「ゆきとせが浦」の釣り人「漁父の太夫」が登場するが、ここでは「山岡太夫」の場合とは正反対にこの「太夫」が「慈悲第一の人」であるのに対し、彼の「姥」が照手姫を人商人に売ってしまう。つまり物語りのなかで「太夫」と女房との対立として表現されていることは、「太夫」といわれる人の中に

仏教精神の片鱗を認めることができ、彼は「慈悲の人」であると共に、これと相矛盾する「人売り」という「恐怖の人」が背中合せにピッタリと貼り付いているということである。

こうした「太夫」の二面性は、説経節の物語りのなかでは夫と妻の対立となって現われるばかりか、また子供達の性格の対立としても現れており、「山椒太夫」の息子の間の人格的な対立の中に、この二面性を認めることができる。三郎が太夫と同じ「恐怖の人」であるのに対して、二郎は「慈悲の人」であり、太郎には仏教への帰依の心が窺われる。物語りの最後で復讐の対象となり罰を与えられるのは前二者であり、後二者には賞として太夫の遺領が与えられる。以上から「太夫」は常の人には見られない「慈悲の人」の側面と「恐怖の人」の側面という相対立する二つの面を持った、両義的な性格の持ち主であることがわかる。一般人々は「異人」に対して恐怖を感じる傍らで、常ならざる優しさを認めていたのであるから、このようなへ良い面はとても良いが、悪い面は一層悪い」とする両義的な認識は、常の人ではない「異人」に対する認識の、決まり切ったタイプを示していることとなる。以上から「太夫」とは常の人・農耕民から見て「異人」となろう。

また「山岡太夫」が旅人相手の「宿」を営む傍ら、人身

売買を行う「商人」であるとする、こうした二側面は説経節『まつら長者』では「人買い」で「有徳なる商人」の「ごんがの太夫」と、その奈良での宿の主人「つる屋五郎太夫」の二人の人物となって登場する。以上から『をぐり』の「漁父の太夫」も、『まつら長者』の「ごんがの太夫」や「つる屋五郎太夫」も共に「山椒太夫」「山岡太夫」と同じ社会的な存在であることがわかる。また説経節『かるかや』では、学文路の宿の玉屋の与次が語る「高野の巻」という空海の話の中で「とうしん太夫」という四国讃岐の国白方の屏風が浦の釣り人が登場する。釣り人・漁民の商人への変化、商人の源流としての海民を考えると許されるとすれば、以上の例から「太夫」の共通項として釣り人・海民を導き出すことができよう。それ故説経節における「太夫」とは、異人としての海民を基底とし、そこから発生した商人や「宿」を営む人々を含むものゝとすることができよう。

ところで丹後の隣国で、ほぼ同じリアス式海岸からなる若狭の海縁村落について、網野善彦氏は黒川正宏氏の研究⁽⁸⁾を踏まえ次のように述べている。「鎌倉初期に若狭湾の浦々に定着しつつあった海民達は『大網』を共有し漁業の他製塩業にも従事していた。共同体成員としての『太夫』達、或は其の中の有力者である『権守』達は、自己の自立性を

保証すべく夫々家屋と小船と、ごく少ない田畠とを持っており、更に彼等の共同体の代表者は『村君』又は『浦刀禰』と云い、塩釜を持ち、山守職・山預職をもとに塩木山を占有していた。つまり、ここから「太夫」とは漁村において「共同体成員たることを承認された人々」「平民的の海民」となる。更に網野氏の主張するところでは、この海民が神社に身を寄せ神人となり、更に商人や都市の住民になっていくとある。以上から「太夫」は釣り人・海民は事実を以て確かめられたこととなる。

「山椒太夫」が多くの下人を抱え、製塩業を営む傍ら塩木山を持ち、由良千軒に対して強い支配権を持っていたこと等から、「山椒太夫」の原像は「村君」ともいわれたこの浦刀禰にあり、「さんせう太夫」の名前自身、刀禰職を持つこの「山守（さんしゅ）」の「太夫」、「山預（さんよ）」の「太夫」から来ているのかもしれない。更に黒川氏によれば、「権守」を称する人々には海縁村落の浦刀禰のほか能の座における座頭、農村の在地庄官や名主層、武士団の首長等を挙げておられるが、ここでは海民と芸能の民との共通性に注目したい。この背後に「贅」と芸能との関係を見ることができるよう思われる。

ところでここで網野氏が特に「下人・所従的海民」の存在をあげていることや、「太夫」達が梶子・下人を所有して

いたことに注目すべきであろう。海民達の世界では下人の存在や下人売買の存在は当然のことであつたと思われる。それ故、「太夫」を名乗る「山岡太夫」「ごんがの太夫」「つる屋五郎太夫」あるいは「漁父の太夫」の「姥」達が一般人にたいして「異人」としての自覚を持ちつつ「宿」を営み、人の売り買いに係わりを持ち、また人商人であつたことはこうした歴史的な事実を反映しているように思われる。⁽¹¹⁾弘長元年二月の『関東新制条々』の第五七条（鎌倉幕府追加法『三九三』）には「可令禁断人勾引并人売事」として、「件之輩等、任本条可被断罪、且称人商専其業之輩、鎌倉中并諸国市之間、多以有之^{云々}」とあり、「鎌倉中」や「諸国の市」の間に「人商人のネットワークがあつたことがわかる。説経節の世界では「太夫」と名乗る人達がそれに対応しているのである。

ところで我々は既に別稿で「山椒太夫」とは説経語りのこととしてきた。今ここで「太夫」を人商人とすると、ここから直ちに説経語り＝人商人となる。これは「サーカスの人さらい」と同様とも思われるが、このように説経の徒＝人買いとすることには抵抗がある。しかしこれから述べる如く両者が互いに対立し合うという点で、ごく近い関係にあることは否定できないのであるから、人買いと説経の徒とは同一物の表裏に関係にあり、互いの半身であつた可

能性がある。例えば、狂言の『自然居士』では、説経語りと人商人の両者が登場し、両者の対立・互いの遣り取りが劇の中心を構成していることをあげることができる。また世阿弥の作で廃曲となつた『逢坂物狂』のストーリーは、人商人に我子をさらわれた男が逢坂の関で盲目に会い、彼がささら・羯鼓を鳴らして謡い狂うのを見ると、連れの童は捜し求めていた我子であり、盲目は説経の徒の祖神・蟬丸の化身であつたというものであり、ここでも説経の徒は人買いと何らかの関係にあつたことは明らかである。⁽¹³⁾

つまり説教の徒は専ら「慈悲」の心を持つ人として登場するが、一方人商人は、恐怖の存在である。〈恐怖の人〉も〈恐怖の人〉も共に「過剰」を表しており、常の民から見れば「異人」となろう。以上から「太夫」とは下人と関係の深い「海民」であり、「商人」であり、また芸能の民となる。これを非農民と纏めることができるとすれば、彼らは農民から見ても「異人」となろう。『国語大辞典』⁽¹⁴⁾で「太夫」の⑧に「強盗、窃盗をする者をいう。盗人仲間の隠語」とあるのは、こうした異人としての「太夫」と関係があるように思われる。

小沢昭一氏は『日本の放浪芸』⁽¹⁵⁾の中で「かつて、定住社会からはみ出した放浪芸人たちは、呪術まがいのたぶらかしを、舌先三寸にのせて人々の上に投げかけて、その日を

生きていったのである」と述べておられるが、人買いが説經の徒の半身であることは、人々から賤視されていた芸能の民の報復や反発のエネルギーと、恐ろしい異人の面影を垣間見せるものである。

第二章 山民の世界と犯罪奴隸制

前章で我々は説經節に登場する「太夫」の分析を通じて、海民の世界で人の下人化・人身売買が行われていたことを見てきた。ここでは海民と並んで異人とされた山民の世界ではどうかを検討の対象としたい。戦国家法の一つ伊達の『塵芥集』⁽¹⁶⁾にはマタギ法・狩獵法として知られる六十四条、六十五条があるが、これまで余り論じられたことがないように思われるのでここで取り上げてみたい。それぞれ次のようにある。

(64)一 他国の商人、其外往復の万民、或は山立、或は事を左右によせ、人の財宝を奪ひとる事、後先の鄉村の越度たるべし。たゞし、かの科人申出づるにおゐては、其咎をのがれべきなり。

(65)一 山中行き帰りの人を、盗人、狩人となずらへ、人の財宝を奪いとる事、その例多し。しかるうへは、いまより後、狩人路次中より三里の外にしてこれをなすべし。三里の内にて狩をいたし候はゞ、盗人の

罪科たるべし。たゞし狩人鹿に目を懸け、追ひ来たらば、是非にをよばざるなり。又山人たき木をもとめに深山へわけ入るとき、山立狩人となずらへ、山人を取る。しかるに山人不慮にのがれきたり、狩人を見知るのよし申出でば、くだんの盗人、たとひ眞の狩人なりとも、山人の口にまかせ盜賊の罪科に処すべき也。

第六十四条の「山立」は「狩庭を立てる」という意味であり、第六十五条のそれは「狩庭を立てた人」の意であろう。なおここで注目すべき第一は、この「山立」という言葉には「狩人」と「山賊」の二つの意味があること。その第二は、第六十五条には「盗人の罪科」という言葉で狩人に対する法的な抑圧が、二度にわたり為されていることである。一度目は「路次三里以内」での狩獵の禁止、二度目は「山人の口まかせ」として「山人」よりも法的地位を低くすることによって。これは文明の成立以来、常に文明の側が狩獵民等未開の民に対しておつてきた態度であり、こうした狩人抑圧策・狩獵民犯罪者観が狩人と盗人との同一視という問題を生み出してくるのである。このマタギ法からも、狩人と山賊とは相互に転換可能なものとして当時一般の人々には見られていたことがわかる。ここにも山民である狩人を海民と同様異人視する見方のあったことが知

られる。

第六十四条には「或は山立、或は事を左右によせ」とある。ここから「山立」ということが「人の財宝を奪ひとる」何か積極的な理由であったことが知られる。更に第六十五条からは「盗人」「山立」が「山中行き帰りの人」や「たき木をもとめに深山にわけ入」った「山人」を「狩人となずらへ」ることによって、前者からは「財宝」を、後者からはその身柄をそれぞれ「奪い取る」ことができたことを窺い知ることができる。その理由として、ここに狩人・マタギ達の持っていた、「狩庭法」とでもいべき法の痕跡を見て取ることができるようと思われる。つまり、マタギ達の世界では、後述するアイヌのイオルの法と同様に「狩の庭」には他の狩人達は入ってはいけないという慣習法がまず存在し、この法の侵犯者は「盗人」とみなされ、所持物品の没収とか、身柄の拘束という刑罰が科せられることになっていたのであるまいか。更にこうして罪を犯して身柄を拘束されたものは、下人となっていたと思われる。

弘安八年の大和春日神社の「起請文落書」には人殺し・強盗・山賊等の犯罪に混じって「神鹿害、山立人充、或所当未進⁽¹⁷⁾」とあるが、この「山立を人に充てる」とは、山賊行為か、あるいはまた保立氏の言われる「人さらい」⁽¹⁸⁾を指しているように思われる。つまりここでも「狩庭」を理由

として、その侵犯者に対する身柄の拘束・持ち物の没収等の犯罪が行われたことを知ることができる。それ故山賊達はいは「山立」と称し、あるいは「山中行き帰りの人」を「狩人となずらへ」ているのである。以上から、山民・狩人の世界・マタギ法の世界においても「犯罪奴隷」の制度があったことになる⁽¹⁹⁾。

石井進氏は「身曳きとへいましめ」⁽²⁰⁾において「犯罪者が下人となる」ケースを明らかにされた。石井氏はこうした犯罪奴隷の制度は古代の「役身折酬」制の背後にも認められるとされ、更に遠く三世紀の『魏志倭人伝』の世界にまでその存在は遡ることができるとしておられる。ところでアイヌの世界において、ある特定の共同体が占有し、排他的に狩猟・漁撈の権利を主張しうる、主に河を中心とした空間をイオルというが、このアイヌのイオルについて泉靖一氏⁽²¹⁾は次のように述べている。「生活の場としてのイオルにあつては、そのイオルに所屬していない人間が、生産活動を営むことは嚴重に禁止されている。もし無断で他のイオルに侵入して、獲物を得たことが発見されると、その獲物を没収されるばかりでなく、ときには侵入したコタンの奴隷にされたり、重い罰金を要求されたりする。あらかじめ断つて他のイオルに入るときには、それ相当の謝礼が要求

される。謝礼は宝物の場合もあれば、獲得したものの一部である場合もある。桜井清彦氏もまた『アイヌ秘史』⁽²²⁾において「他のイオルの住民の侵入を許さず、犯すものには獲物や武器を没収し、髪の毛や髭を剃るなどの名誉刑に処し、捕虜として使役するなどの厳罰が課せられた」と述べておられる。以上から明らかなごとく、アイヌの世界には、他人の狩猟圏を犯した侵入者は「盗人」として相手側の奴隷になる」という「犯罪奴隷」の法が見られたのである。

ところでこの狩猟法・「イオルの法」はそのまま縄文時代にもあてはまり、犯罪奴隷の存在は遠く縄文時代にまで遡ることができるのではあるまいか。もちろんこの前提には縄文時代が豊かな自然を背景にした、成熟せる定着的な狩猟・採集・漁撈社会であったこと、縄文人たちが定住的な堅穴住居を営んでいたこと等が、この「犯罪奴隷」制を成り立たせる大きな条件であったと思われる。⁽²³⁾このように考えることができるならば、縄文時代以来のイオルの法（これを「縄文法」と名付ける）は、戦国時代のマタギ法にそのまま引き継がれていると見ることができよう。もちろん戦国期の伊達の領内の猟師達をそのまま縄文人の生残りとすることはできないけれども、「山言葉」等のタブーに依って守られてきた狩猟の世界が、古い時代の法慣習等を伝えていることだけは間違いあるまい。

農業の開始・文明の成立と共に、こうした法の世界は農耕世界の片隅の境界領域に押し込められてくる。しかしこの境界領域こそ藤木久志氏が「豊臣平和令と戦国社会」⁽²⁴⁾において明らかにされた如く、山・野・川を巡る山論・水論といった中世村落の自力救済や、市道の独占権を巡る「座」の商人達の実力行使が展開される荒々しい世界なのである。更に江戸時代では、他人の「ししやま」に入った猟師たちは「よき」「なた」「鑢」「ほい丁」等の刃物類のほか「鍋」にいたるまでの山仕事の道具が没収される。しかしこうした、一定の占有地域に対する侵犯者への制裁処置としては、「山論」の場合は「山方の大法」といって犯人の所持している「鎌」「斧」等の山仕事の道具の没収（鎌を取る）であり、「座」の商人であればその商品の没収が挙げられるのみで、身柄の拘束・奴隷化ということは見当らない。もっとも藤木氏が述べておられる如く、この「鎌を取る」行為には、凡下・百姓からその身分標識を奪い取る「身分刑」としての性格を指摘することができるのであるから、「山方の大法」にはイオルの法との連続性を見ることができ、犯罪者の奴隷化はこの「身分刑」の極端な場合といえることができよう。

一方、犯罪を取り締まる側は、犯罪者の在り方に逆に強く規制されること、あるいはまた、文明世界において狩猟

文化を一番色濃く伝えていた人々が武士であったことから、「縄文法」の第二の継受者は武士自身でもあった。ここに石井進氏のいわれる「いましめ」の問題、下人Ⅱ犯罪者が出てくるのである。つまり中世においては、文明世界の中心に武士を主人とした下人制度が、さらに世界の辺境に海民・山民達のマタギ法等に基づく下人制度が残存したことになる。

第三章 下人と職人の比較

『山椒太夫』の中の御台の物語りには「蝦夷が島の商人は、能がない職がないとて、手足の筋を断ち切つて、日に一合を服して粟の鳥を追うておわします」とある。また説経節『をぐり』でも、青墓の宿の遊女屋の主人に買い取られた照手姫は、初見参に際して命ぜられた「遊女勤め」を断るが、これに対して主人は次のようにいう。「さて明日になるならば、これよりも蝦夷・佐渡・松前に売られては、足の筋を断ち切られ、日に一合の食を服し、昼は粟の鳥を追ひ、夜は魚・鮫の餌にならうか。十二単を身に飾り、流れを立てうか、あけすけ好め」。ここから、蝦夷や佐渡・松前での「鳥追い」は「魚・鮫の餌になる」との同一視されており、当時最も恐ろしい奴隷労働とみなされていたことがわかる。⁽²⁵⁾

しかし注目すべきは「蝦夷が島の商人は能がないとて」という部分である。「をぐり」の照手姫が「もつらが浦」から次々と売られていく際にも、「○○の商人が価が増さば売れやとて○○へ買うてゆく」という言葉七回と共に、この「○○の商人が、能がない職がないとて○○へ買うてゆく」という言葉が二回リズミカルに登場する。前者の「価が増さば売れや」とは投機を目的とした売買を言い、いわば商品の交換価値的側面に対応しているのに対して、後者は商品の使用価値的側面に対応した言葉である。

これは当時非合法であった人身売買の様子を伝える大層興味深い史料であり、七回、二回に意味があるとすれば、一つには当時商品としての人間は貴重で、投機の対象であったことを示すものである。例えば、安寿と厨子王の姉弟は「越後の国直井の浦から売り初められ」「あなたにては代物よ、こなたにては商ひ物よ」と七十五人の手を経て丹後由良の山椒太夫に買い取られる。山岡の太夫が宮崎の三郎に売った時の値段が二貫五百であったのに、山椒太夫が買ったのは十三貫とある。常陸の小萩の場合も継母に大和の国宇陀から伊勢の国二見が浦に売られて以来、「この太夫殿までは、四十二手に売られた」とある。『をぐり』においても太夫の姥が照手姫を「もつらが浦の商人に、料足一貫文か二貫文に、やすやすと打ち売つて」方々を転売された挙

げ句、美濃の国青墓の宿、よろず屋の君の長者が買い取ったときの値段もまた十三貫とある。

また一つには、このように地方を転々と売られることの結果、下人自身が自己を商品として売買される「商ひ物」代物」として認めるという「味付け」効果を挙げることができよう。初見参の際、安寿や照手姫が見せるそれなりの「したたかさ」は、こうした転売の過程で身に付いていったものであろう。例えば、照手姫は「遊女勤め」を断り次のように述べる。「なう、いかに長殿様。さて自らは幼少で、二親の親に過ぎおくれ、善光寺参りを申すとして、路地にて人がかどはかし、あなたこなと売らるるも、内に悪い病がござあれば、夫の膚を触るれば、必ず病が起りて、悲しやな病の重るものならば、値の下がらうは一定なり。値の下がらぬその先に、いづくへなりとも御売りあつてたまはれの」。

しかしここでは「能・職」の有・無が下人の売買に際して重要な判断材料となっていたことに注目しておきたい。「能・職」があれば、主人から重宝がられると共に、商品としても高く売れたのである。この「職」の用例として、安寿と厨子王の姉弟が思い余って死のうとすると、止めた小萩が「初めからは慣らはぬぞ。慣らへば慣るる習ひあり。柴をえ刈らぬものならば、柴を刈つて参らすべし」。

潮をえくまぬものならば、潮をもくんで参らすべし。命を惜へ」といったのに対し、安寿は次のように答える。「あふ、その職が成らいでに、命を捨てうとの申し言なれ。その職だにも成るならば、何しに命が捨てたかるべきぞ。また山椒太夫の許を逃げ出した厨子王が国分寺の和尚に助けを請いていう言葉にも次のようにある。「あの太夫に買ひ取られ、刈りも習わぬ柴を刈り、くみも習わぬ潮をくみ、その職がならいでに、これまで落ちてござあるが——」。

しかしこの「能・職」は、本来「職人」に要求されていた資格である。彼らはこれをもとに天皇、院、摂関家、將軍家、寺院、神社等の権門に奉仕をし、「供御人・殿下細工・寄人・神人・供祭人」等と自称し、逆に権門より数々の特権を与えられていたのである。彼ら「職人」達の前身が権門の隷属民であり、一方イエの隷属民が「下人」だとすれば、両者は共に隷属民として共通していたことになる。例えば網野善彦氏は、これら権門に従属する「職人」には中世後期以降差別の対象となる「非人」をも含み、本来彼らは「出入りの職人」の如く主従制下にあるという側面を持ちながらも、複数の主人を持つことができたことから「自由人」であるとされ、一人の主人に駆使される不自由人の「下人」と区別しておられる。

一方、石井進氏は「主従の關係」⁽²⁷⁾において、武士の主従

制を分析し、譜代相伝・直参と外様・懸参の二つの類型を挙げておられるが、以上から「職人」は複数の主人を持つ「懸参」タイプであり、「下人」は本来「譜代相伝」のタイプに対応していることがきよう。ここから下人と職人は互いに近い関係にあったことが考えられる。例えば鎌倉期の『宇都宮式条』⁽²⁸⁾六一条や戦国期の『結城氏新法度』⁽²⁹⁾八一条では共に下人等の商業活動を禁止している。この法令の前提として下人と職人（この場合「商人」）との間に相互転換が起りやすかったことが考えられる。

しかしこれまでの研究が明らかにしてきたところに依れば、両者を決定的に隔てるものは「座」の存在であり、「座」によって彼らは従属的な身分からの解放を勝ち取ったとされている。例えば網野氏は『東と西の語る日本の歴史』⁽³⁰⁾において、タテの論理とヨコの論理、西の「職能国家」と東の「主従制的国家」等をあげて「イエ的社会とムラ的社会」という東西社会の対立を述べ、「座」の有無はこうした東西社会の違いを解く鍵としており、更に西国の「職人」達は「座的結合」の下で、その権利を世襲化させていたとしておられる⁽³¹⁾。

しかし注目すべきはこの「職人」の世界もまた「山民」「海民」の世界と同様、下人を多く含んでいた点である。次章で述べる如く、人の従者になる儀式は、弟子入りの儀式と

共通していたのであるから、弟子は従者とみなされていたことは明らかであろう。八木明夫氏も中世の商工業の説明の中で、「手工業技術の伝習が家という共同体の中で、親子方という関係において行われる」ことを指摘しておられる。現在でも国技・相撲や落語家の世界、あるいはまた、宮大工とか刀鍛冶といった伝統的な技術の伝承の場合、修業期間中は内弟子と云って譜代下人と良く似た人身的な隷属関係の下に置かれることは良く知られている。

ところで一方「売買」とは商品と貨幣との交換、すなわち「商品交換」であり、「主従制」もまた「御恩」と「奉公」との交換である以上、売買関係と主従制度とは共に「交換関係」という、より基本的な関係の下で比較することができる。一般に、売買関係における売手と買手は、水平関係において考察されるのに、主従関係は上・下関係として垂直的に捉えられる。つまり下人達は「能・職」を主人に売って、代わりに「扶持」を得ていたのではなく、主人と下人の関係は、主人の下人に対する「御恩」に対し、下人の側は献身的に「奉公」をなすべしとされていたのである。

つまりこの「御恩」と「奉公」の関係においては、「御恩」の側が能動的で、様々の形の「奉公」を要求したのに対して、「奉公」の側は受動的で、「御恩」との等価形態を常に要求される立場にあった。それ故、下人側の提供する「能・

「職」は「奉公」として要求される様々な等価物の一つとして位置付けられ、それ自身の価値はなかなか評価されにくかったと思われる。これはちょうど、近代資本主義社会における労働者がその「能・職」を「理性」の制御下において発揮するのと正反対である。例えば狂言の『縄綯』において、博打に負けて太郎冠者まで取られた主人が彼を「たらしめて」相手の下に「文」を持って行かせる。新しい主人から事の由を聞いた彼は、「ふて」て命じられた仕事をしない。つまり中世の下人が「能・職」を発揮するか否かは、専ら主従の情緒的な関係、「感情」に依存していたのである。

これに対して「職人」達は、与えられた特権をもとに、自己の持つ「能・職」の果実を商品として市場等で「売って」自立的な生活を立てることが可能であり、更に市場等における「職人」と「お客」の関係は、「職人」の側が「売る」立場にあり、「お客」はそれを必要とする限り「買う」のである。ここから当然、必要としている「買う」側の方が受動的な弱い立場にあり、逆に「売る」側は能動的に相手から等価物として貨幣等を要求しえたのである。こうして市場等で強い立場に立つことができることが、「職人」に自由を保証していたのである。

以上から明らかなように、イエ経済と市場経済とでは、「能・職」の在り方が正反対で、「下人」と「職人」が同じ

サービスをしたとしても、そのサービスの持つ社会的な関係は、受動的と能動的と大きく対立していたのである。例えば、江戸時代の家訓の中に「商好の者と深く知音無益也、奉公も商にするぞと主人が見たらば大事と被仰候事⁽³³⁾」とある如く、ここからイエ経済・主従制と市場経済とが互いに対立関係にあったことが導き出されよう。

M・ウェーバーはギリシャにおける奴隷制の問題に触れて「家内奴隷制は一家計の奴隷所有が増大すればするほどそれだけ多数の特殊化された専門家を家の内部において訓練し、そして少なくともそれとほぼ正比例して自由人の『賃仕事』を排除した」と述べている。ここから例えばローマ帝国の滅亡について、国際的取引の発展が奴隷制に基づくオイコス経済の肥大化を結果し、これが帝国の各地を結び付けていた薄い網である市場経済をますます薄くさせ、帝国の分解を招く原因となった⁽³⁵⁾という議論が生まれてこよう。

日本中世の世界においても、例えば小早川の領内の沼田市場に対して、小早川の家臣が市場内に居住したり、市場の女性と接触を持つことが厳しく禁じられている。これを網野善彦氏は「無縁の原理⁽³⁶⁾」として説明しておられるけれども、私としては上述のイエ経済と市場経済との対立という原理の方がより事実在即していると思う。

第四章 初見参とコトアゲ

柳田国男は「藪入り」の説明に「オヤゲン」「ゲンゾ」という言葉を取り上げている。これは「見参」「見えまいらす」の意で「正式の対面」が始めての、または改まった人に対面すること」を意味しているのであるから、下人・奉公人が主人と主従関係を取り結ぶ際に、武士相互間における主従関係成立の際の初参・見参とほぼ同じものの存在が想定される。また中世武士の世界における見参の前身として平安時代には「名簿の捧呈」⁽³⁸⁾があったことが知られている。柳田国男は「名を忌む俗信」⁽³⁸⁾に触れて「以前の女は知らぬ人に、名を呼ばれることを欲しなかったのである。我群の中ではそれぞれの地位による名があつて、所謂固有名詞は無くてもすんだ。誰からでも勝手に名を呼ばれて良い婦人は、家を離れて孤立の生活をする者だけで、その数は甚だ限られて居たのである」としているが、こうした「名のタブー」を基礎として、「名簿捧呈」が産み出されたと考えることができる。

『山椒太夫』の物語りにおいても、姉弟は初見参に際して太夫から名前を聞かれ、「姉は姉、弟は弟と申して、つひに定まる名もござない。ただよき名を付けてお使ひあれ」と返答し、名乗りをあげない。山岡太夫に名を名乗り、己の

秘密を語った上でだまされた母と比較すると、この名乗りをあげないという態度には前述した「名のタブー」と共に、世の荒波にもまれた姉弟のしたたかさを見て取ることができよう。この物語りにおいて主人公の厨子王が名乗りをあげるのは、国分寺の和尚に「すがりつき」助けを求める場合と天皇に会った時の二度だけである。

「名簿の捧呈」については、日・欧の封建制の比較という観点で早くから注目されてきた。中田薫「コンメンダチオンと名簿捧呈の式」⁽³⁹⁾がそれである。この「コンメンダチオン」はA授手の式、B宣誓の式、C贈与授受の式の三段の行為よりなり、中でも重要なものはAの授手の式・オマージュである。これは「自己の独立を放棄して他人の権下に身を委す」ことを示すもので、相手に降伏する場合等に行われたゲルマンの慣習に基づいているとある。一方「名簿捧呈」の行われる場合も、人の弟子や従者となる場合、敵に降伏する場合に限られているとある。

例えば前述した『山椒太夫』の物語りの場合、名乗りをあげることはいずれも「自己の独立性を放棄して他人の権下に身を委す」ことを表していることができよう。ことに母御が山岡太夫に向かって「あれあれ御覧候へや。これに伏したるわつばこそ、奥州五十四郡の、主とならず者なるが、さて不思議なる論訴に、都へ上り、みかどに

て安堵の御判を申し受け、本地に返るものならば、やはか太夫殿に、切に施料が惜しかるべきか」と自己の秘密を語ってしまふことには「相手に身を委せる」意味合いを強く窺うことができる。だからこそ山岡太夫にだまされて売られてしまったのであらう。日本古代の「名簿捧呈」と西欧におけるオマージュの儀式とのこうした共通性から、両者の比較が可能とならう。

一方藤原良章氏が「鎌倉幕府の庭中」⁽⁴⁰⁾において述べておられる如く、武士の見参の場は、裁きの場と同じ「庭中」であり、主人が座敷に居り南面しているのに対して、下人は庭に跪き北面して対面するという形を取ったという。この場合庭に居る人は、オマージュと同様相手に身を捧げるということ全体で表現していたことにならう。また、保立道久氏は「中世前期の漁業と庄園制」⁽⁴¹⁾において『宇治拾遺物語』の説話(二〇九)を引いて、中世前期の主従関係について「主人の食べ残した下物を食べることは人的従属の基礎的標識であった」として特に共同飲食の関係に注目した上で「名簿の奉呈と仕着せ・下物の下賜などが主従関係の契約の象徴として、セットで現われる」ことを指摘しておられる。この「仕着せ・下物の下賜」はCの贈与授受に対応していると考えることができよう。

ところで説経節における下人の初見参の場合、新たに下

人として外部世界から買い取られ、イエ世界内に取り込まれる過程と、イエ世界の内部で一定の役割を分担させられる、定着化の過程の二段階が考えられる。前者はイエ世界と外部世界との関係であり、「売券」等の「文書」の取り交わし等があったのに対して、後者の「見参」はあくまでもイエ世界内部の問題であり、イエ共同体を代表する主人と新参者との対面、「口頭」での「会話」の取り交わしであり、これを契機にして新参者の共同体内部への仲間入りが行われたのである。⁽⁴²⁾また、買い取ってから「見参」までには多少の時間を置くことになっており、『山椒太夫』では「ある日のうちのことなるに、きやうだいをお前に召され」とあり、『をぐり』でも「一日二日は、よきに寵愛をなさるるが、ある日の雨中のことなるに、姫をお前に召され」とある。この「雨中」での「見参」には主人の冷酷さや今後の姫のあり方が象徴されている。

初見参の一つの中心は名前の確認である。これは主人公が下人を「呼び使ふ」必要から行われたものである。『山椒太夫』の物語では、初見参に際して太夫から名前を聞かれた姉弟は「姉は姉、弟は弟と申して、つひに定まる名もござない。ただよき名を付けてお使ひあれ」と返答する。更に国名を問われ、「伊達の郡信夫の荘の者」と答えたことから、下人として「忍」「忘れ草」と命名される。『をぐり』

でも初見参の日に照手姫は主人から「なう、いかに姫。これの内には、国名を呼うで使ふほどに、御身の国を申せ」と言われ、「常陸の者」と答えたことにより「けふより御身の名をば、常陸小萩と付くる」と命名される。

特に『をぐり』からは下女はその国名で呼ぶ習慣のあったことが窺われる。禰寝文書の建治二年正月三十日付けの所従抄帳には「吉野、和泉、周防、若狭」という婢の名前があり、これについて水上一久氏は「国名を付するは平安以来女官や婢に例のあること」と述べておられる⁴³⁾。しかし「同(武部)三子得分」にある「吉野、市、ほぎ、姫王母子二人、小加羅、和泉」の「小加羅」もまた国名なのではあるまいか。そのように考えることができるのであれば、彼女は「倭寇の略人」等の理由により朝鮮半島よりさらわれ、この大隅まで売られて来た人であった可能性がある。

名前の確認の次が労働内容の確認、つまり「労働契約」である。『山椒太夫』ではそれぞれ「奉公」として「塩汲み」「柴刈り」が命ぜられ、翌朝早くに「鎌」と「おうこ」と「桶」と「柄杓」が与えられる。『をぐり』でも「遊女勤め」が命ぜられ、「十二単」が与えられようとする。このところはヘコンメンダチオンのCの贈与授受と似ている。しかし照手姫はこれを断り「値の下がらぬその先に、いずくへなりとも御売りあつてたまはれの」と要求する。ここから

イエ世界内部への定着化がうまく行かない場合には、下人はまた外部世界へ「売られる」こともあったのである。

しかしここで注目すべきは、その際の主人の言葉に、それぞれ「太夫をよきに育まい」「君の長夫婦も、よきに育んでたまはれ」とあることである。ここで要求されていることは、主人が下人を「育む」ことの反対給付として、下人もまた主人を「塩汲み」「柴刈り」「遊女勤め」等々の形態で「育む」ことである。この「育む」ことだけに注目すれば、主従は互いに対等となろう。しかしかかる「互酬」制の背後には、互いに相手を育むための物質的な条件に大きな差異が存在することもまた見なければなるまい。太夫や長者が下人を育むには、同じ釜の飯の一部を分け与えれば、それで十分であったのに対して、下人の側は自己の労働力のすべてを投入することが必要とされていたのである。つまり「互酬」という形式的平等性によって、主人は下人を支配し、下人の労働の果実を搾取することができたのである。

以上から初見参の際の主人の言葉には新参の下人を呪縛するマジカルな力があつたことになる。つまり「自分の意志を相手に向かって宣言すること(コトアゲ)」に霊的な力があるという「観念」⁴⁵⁾がここでも「生きていた」と見ることができよう。藤原氏は前述の論文で「古典的」なものとい

う言葉で「庭」における「口頭の世界」の問題を論じておられる。このように考えることができると思えば、Bの従者の側からの宣誓が、日本の場合は主人のコトアゲに取って替えられていることになる。

この『山椒太夫』の物語りに登場するもう一つの「見参」の場面は、梅津院の養子となった厨子王が行う天皇との対面である。「あらいたはしやつし王殿は、今は名乗り申さうか、今名乗れば、父岩城殿の御面目、又名乗り申さねば、養子の親の御面目、父の面目追つてのこと、まず養子の親の威光をあげばや、とおぼしめし、膚の守りの、志太・玉造の系図の巻物取り出だし、扇に供へ、はるかの上に持つて上がり、その身は白州に跳んで降り、玉の冠を地に付けて、答拝たがはい召されておはします」。庭の白州に平伏する厨子王と、座敷の中の天皇、名前を証明するものとしての「系図の巻物」となれば、ここは「庭中」における「名簿捧呈」に相当しよう。

これに対し、「二条の大納言」がこの巻物を読み上げた後で、「みかど観覧ありて、『今までは、たれやの人ぞと思うてあれば、岩城の判官正氏の総領つし王か。長々の浪人、何よりもつて不便なり。奥州五十四郡は、元の本地に返しおく。日向の国は馬の飼料に参らす』と、薄墨の御綸旨をぞ下されける」となる。ここところは主人のコトアゲ

と贈与授受に対応しており、例えば頼朝の場合はこの「綸旨」の代わりに「下文」の授受があったとなろう。この後「つし王殿はきこしめし、今申そうか、申すまいとは思へども、今申さいで、いつの御世にか申すべし。『奥州五十四郡・日向の国も望みなし。存ずる子細の候へば、丹後五郡に相換へてたまはれ』とぞお申しある」とあって物語りは更に進展して行く。いずれにせよ、ここにもBの宣誓の式が見られないことを確認することができよう。

第五章 譜代相伝の論理と外様の論理

『山椒太夫』の物語において、太夫の家における主人達と下人の姉弟との関係は、「譜代相伝の論理」と「外様の論理」との対立・葛藤として理解することができよう。まず最初、太夫はこの姉弟を買い取り、初めて見た時に、つぎのように喜びの声を挙げる。「さてもよい譜代下人を、買ひ取つたことのうれしやな。孫子・曾孫の末までも、譜代下人と呼び使はうことのうれしきよ」。また、姉弟の逃亡計画を三郎の密告で知った際も、次のように述べている。「いづくの浦ばにありとても、太夫が譜代下人と呼び使ふやうに、印をせよ」。ここでの火印の持つ意味は、下人に対する刑罰のほかに、牛や馬に焼金で所有者の印を付けるのと同じ考えのあったことが知られる。

一方、姉弟は命ぜられた柴刈りや塩汲みを苦に心中を試みるが、これを見付けて止めに入った、同じ下人の小萩の言葉に「やあやあ、いかにきやうだいよ。命を捨つと見てあるが、命を惜へきやうだいよ。命があれば、蓬萊山にも会ふと聞く。又も御世には出づまいか。命を惜ふものならば、自らが先祖をぞ、今は語りて聞かすべし。さて自らも、あの太夫殿に伝はりたる、譜代下人にて候はず。国を申さば大和の国、宇陀の者にてありけるが、継母の仲の讒訴により、伊勢の国二見が浦から売られてに、——ことし三年の奉公をつかまつる。——」とある。

ここから小萩は彼女自身の意識としては「譜代下人」ではないとしていたことが窺われる。これを仮に「外様」と名付けるとすれば、太夫の家の下人達はその心の持ち方からこの「譜代下人」と「外様」の二つの類型に分類することができのではあるまいか。「別屋」にいれられた姉弟は逃亡の相談をするが、その際の姉の言葉に「この太夫殿に、遂げての奉公はなるまいぞ」がある。この「奉公を遂げることを」「献身の道徳」と名付けるとすれば、姉弟はここで「献身の道徳」に背くことを申し合わせたことになる。一方「献身の道徳」で固まった「譜代下人」の代表として、この物語りでは下人達の監督や追い立て役(ドライバー)⁽⁴⁷⁾である「八十五人の手のもの」を挙げることができる。彼ら

は姉弟を「松の木湯船」にいれる時と逃亡した厨子王を追う追手として登場する。

この物語りでは下人達が自己の過去を忘れることと、この「献身の道徳」とは対応しているように思われる。見参の際「よろずのことを思い忘れて、太夫によきに奉公つかまつるやうに」ということで厨子王には「忘れ草」という名が命名されたのであり、これに對抗する形で「今こそは太夫殿、譜代下人と呼び使はるとも、いにしへ伊達の郡信夫の荘で、殿原たち上臈たちの、正月初の御礼の時の、式次第をば忘れさいな」という言葉が姉から弟に語られてくる。既に見た如く「献身の道徳」に対立し、下人相互間の交流・連帯を行うには「先祖」の話が決定的であった。こうして自分の過去を忘れず、「献身の道徳」に敵対する努力の積み重ねが姉弟に逃亡を可能とさせたのである。

この二類型はあくまでも心の持ち方の問題であるが、一般的には主人の特別な恩恵によって、この「外様の論理」が実現されることもありえたと思う。またその実現の一形態としては、前述した懸参タイプの「職人」になることもあったであろう。しかし下人達自身が自己の力でこの「外様の論理」を実現させて行くことが大層困難であったところ、中世の下人制度の問題点が存在するのではなからうか。以上から、主人は「譜代相伝の論理」に依って下人支

配を行っているのに対して、下人は「外様の論理」を以てこれと対抗したと纏めることが許されるのではあるまいか。

注

- (1) 『講座日本思想3秩序』東京大学出版会 一九八三年 所収。
- (2) 『中世の罪と罰』東京大学出版会 一九八三年 所収。
- (3) 『史学雑誌』第九二篇第二二号。
- (4) 『歴史評論』三七六号 一九八一年八月及び同『中世の愛と従属』平凡社 一九八六年 参照。
- (5) 『日本文化の深層を考える』日本エディタースクール出版部 一九八六年。
- (6) 室木弥太郎校注『新潮日本古典集成 説経集』一九七七年、荒木繁・山本吉左右『説経節』東洋文庫 平凡社 一九七三年。ここでの引用はすべて前者による。
- (7) 野間宏・沖浦和光両氏は『日本の聖と賤』において、被差別民の持つ仏教精神に触れ「親の命日に巡礼を留めて善根を積む」「善根宿」の存在を述べておられるが、「山岡太夫」の言う「慈悲の宿」もほぼこれと同じものと思われる。
- (8) 『若狭の海民』『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店 一九八四年 所収。
- (9) 『中世海縁村落における浦刀禰の存在形態』歴史教育研究会『歴史教育』六卷一〇号 一九五八年十月、及び次注。
- (10) 「権守について」『日本歴史』一五〇号。

- (11) 『中世法制史料集 第一巻鎌倉幕府法』岩波書店 一九五五年。

- (12) 『説経節山椒太夫の成立』『列島の文化史』四号 一九八七年二月。

- (13) 荒木繁「解説・解題」(『説経節』前注(6)参照)三一五、三一六頁。

- (14) 小学館。

- (15) 番町書房 一九七四年。

- (16) 『中世政治社会思想 上』『日本思想体系21』岩波書店 一九七二年。

- (17) 『鎌倉遺文』第二〇巻 一五四八九号。

- (18) 『袋持』と『大袋』—中世の「人さらい」の姿『月刊百科』二八三号。なお『中世の愛と従属』(前注(4)参照)には「『大袋』の謎を解く」と改題して収められている。

- (19) もっともこの場合、社会的に公認された制度というよりはむしろ、柳田国男が「山の人生」等で述べている如く「神隠し」とか、あるいは「かどわかし」「ひとさらい」等として里の人々に了解された場合も多かったと思われる。

- (20) 前注(2)参照。

- (21) 平凡社『大百科事典』。

- (22) 角川新書 一九六七年 一二〇、一二二頁。

- (23) 『日本民俗文化体系月報二三』で佐々木高明氏は「アメリカの北西海岸インディアンは採集・狩猟民だが奴隷がいる」と述べておられる。なお佐原真「奴隷をもつ食料採集民」『歴史公論』一一

四号参照。

- (24) 東京大学出版会 一九八五年。
- (25) ここで流罪としての島送りと、島での下人労働とが同一視されていることに注目すべきであろう。このように島での生活を強く忌避する感情がなくなれば、流罪という刑罰は成り立たないであろうが、何故忌避されなければならなかったのかについては、未だ納得できる説明はないと思われる。
- (26) 岩波新書『日本中世の民衆像―平民と職人―』一九八〇年。
- (27) 前注(1)参照。
- (28) 『中世法制史料集 第三卷武家家法I』岩波書店 一九六五年。
- (29) 同右。
- (30) そしえて文庫7 一九八二年刊。
- (31) ここに牧英正氏が「人身売買」(岩波新書 一九七一年刊)において「辺境では人身売買は盛んであるが、畿内周辺では殆ど見られない」と述べておられる理由があるように思われる。
- (32) 『体系日本史叢書8』『社会史I』山川出版社 一九六五年。
- (33) 近藤齊「近世以降武家家訓の研究」風間書房 一九七五年。
- (34) 増田四郎監訳『古代社会経済史―古代農業事情―』東洋経済新報社 一九五九年。
- (35) ウェーバー著堀米庸三訳『古代文化没落論』『世界思想教養全集』河出書房新社 一九六二年。
- (36) 『無縁・公界・楽』平凡社選書 一九七八年。
- (37) 北見俊夫氏『市と行商の民俗』民俗民芸芸叢書 岩崎美術社

一九七〇年)の明らかにした秋田県横手盆地の「奉公人市」であるワカゼ市での主従契約成立は、主人が市場近くのソバ屋・うどん屋・茶屋等の掛店で奉公人に酒を飲ませ、期間と給金(半年に何俵)を決めることにあるという。

- (38) 『妹の力』『定本柳田国男集』第九巻 筑摩書房 一九七二年所収。

- (39) 『法制史論集第二巻』岩波書店 一九三八年 所収。

- (40) 前注(3)参照。

- (41) 前注(4)参照。

- (42) このように二段階に分けて考えることができるとすると、「身曳状」や「戒状」は前段の「売券」に対応しているとなろう。となると石井氏の「身曳きとへいましめ」を見直すことができるかも知れないが、別の機会に譲りたい。

- (43) 「中世譲り状に現れたる所従について―大隅国禰寝氏の場合―」『史学雑誌』第六四編第七号 昭和三十年七月。

- (44) 牧英正「人身売買」(前注(31)参照)。

- (45) 早川庄八「前期難波宮と古代官僚制」『思想』一九八三年一月。

- (46) 「相伝の道理、相伝の理」については峰岸純夫氏の「中世の身分制研究と下人身分の特質」(『中世史講座4 中世の法と権力』学生社 一九八五年)がある。

- (47) G・ローウィック著西川進訳『日没から夜明けまで―アメリカ黒人奴隷制の社会史―』(刀水書房 一九八六年)によれば、奴隷制度維持のためのプアー・ホワイトの巡回人や黒人の監督やドライバーが存在した。(弘前大学助教授)